

岐阜農林事務所の普及活動状況 令和4年9月30日現在

ぎふ農業・農村を支える人材育成

■指導農業士等 農業大学校1年生を受入れ指導

岐阜県農業大学校では、1学年時に約1週間の先進農家への派遣学習を行っており、岐阜管内では、指導農業士等の先進農家が9月12日～17日に、果樹と酪農で各1名、いちご等野菜で3名、計5名の学生を受け入れた。

期間中には、農業大学校の教員とともに農林事務所職員が、派遣先を訪問して学生を激励した。

9月14日に訪問した羽島市で酪農を営む大井牧場では、泊まり込みの学生を受入れており、学生は、朝早くからの搾乳や、トラクターによる集草作業など、一日を通して農家での作業を実際に体験し、充実した日々を過ごしていた。



【笑顔の農大学生(中央)】

(農業普及課長・大野 晴生)

安心で身近な「ぎふの食」づくり

■品目・えだまめ 収穫機械の実演と有効性の検討

J Aぎふえだまめ部会では、産地維持の取り組みとして、収穫調製作業の省力化が課題となっており、農業機械メーカーの協力を得て、収穫機械の実演会を9月2日に開催した。

実演会では、生産者が機械操作し、効率や収穫ロスを確認した。農林事務所は、生産者からの聞き取りの記録や収穫物の品質調査を行い、本機械の有効性を評価した。

今回、実演した収穫機械は1条刈りであったため、当産地の栽培体系には適性が低いことが解った。今後も、最新の機械の性能を実際に確認し、メーカーと意見交換することにより、将来の導入に向けた研究活動を継続していく。



【メーカーによる説明風景】

(園芸産地支援第一係・小森 志保)

■小麦 栽培講習会にて講師を務める

9月6日に、J Aぎふ北方支店において麦栽培講習会が開催された。この講習会は本巣地域水田農業担い手連絡協議会が主催したもので、小麦生産者、J Aぎふ、農林事務所など27名が出席した。

当日は、農林事務所から令和5年産小麦栽培に向けて施肥体系の改訂や新しい赤かび病防除薬剤について説明した。また、J Aぎふからは肥料価格高騰対策についての情報提供が行われた。

令和5年産小麦については本巣地区で205haの作付計画があり、11月上旬から播種作業が開始される。農林事務所では単収向上と実需者ニーズに適合した良質な小麦を生産するため、排水対策や適期播種、除草体系などについて指導し、発芽及び初期生育の確保を図ることとしている。



【講習会の様子】

(地域支援第三係・松本 政行)

ぎふ農畜水産物のブランド展開

■祝だいこん 3年ぶりに栽培研修会を開催

岐阜市北部を中心とするだいこん産地では、関西向け物日需要の祝だいこんの生産が盛んである。風味の強い四十日系品種の祝だいこんは、関西の新年を祝う西京味噌仕立ての雑煮には欠かせない具材であり、10月上中旬には種し、年末の出荷に向けて栽培される。

J Aぎふだいこん部会では、新型コロナウイルス感染症の拡大により、これまで研修会の開催を控えてきたが、今年度は、9月12日にJ Aぎふ則武支店において、感染防止対策のため栽培者を前半と後半の2組に分け、3年ぶりの栽培研修会を開催した。

参加者は合計29名で、同部会長から、高い品質を維持するよう呼びかけられた。また、関係機関から、規格を守り計画出荷することが高品質で有利販売につながるということが説明された。この後、農林事務所から、これまでの生産上の問題点を分析し、高温・乾燥対策の必要性やリピングマルチの導入による有機物の投入について説明した。

農林事務所では、J Aぎふと協力し、は種後の調査による生育状況の把握と指導を行うこととしている。

(園芸産地支援第一係・砂川 匡)



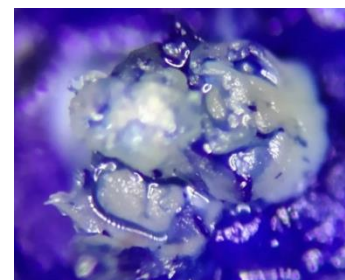
【研修会の風景】

■いちご 花芽検鏡を実施

いちごの土耕栽培では定植時期、また、高設栽培では給液開始時期の決定が、その後の生育に大きく影響するため、農林事務所では9月6日以降、管内産地のいちご苗の花芽検鏡を実施している。花芽検鏡は、いちごの苗のクラウン（根元）部分に花芽が形成されているかどうか、内部を実体顕微鏡を使って調べる作業のことで、花芽が確認できないまま定植や施肥を行うと、栄養生長が盛んになり収穫開始時期が大幅に遅れる危険がある。逆に花芽の成長が進み過ぎると、着果数の減少等につながるため、この時期の大切な作業として実施し、結果に基づいて最適な定植や施肥の開始時期を生産者に指導している。

昨年は、8月中旬以降の天候不順が花芽分化に大きな影響を及ぼし、出蕾が極端に前進化するほ場が多くみられた。本年は、9月の高温により多くの品種で花芽分化が遅延する傾向となっている。また、「美濃娘」では花芽分化のバラつきが見られる状況となっている。

(園芸産地支援第二係・菊井 裕人、若原 浩司)



【花芽分化の様子】

■加工・業務用キャベツ 関係機関が連携しほ場巡回指導

農林事務所では、加工・業務用キャベツの栽培を支援しており、9月27日と29日に、関係機関（J A全農岐阜、J Aぎふ）と連携し、ほ場巡回調査を行った。

岐阜管内では本年度、作付面積7haで約20tの出荷を予定しており、生育状況の把握や出荷に向けた情報交換を行った。

今年は、8月下旬から9月中旬の降雨と台風の影響で、定植が遅れたほ場で生育の遅延が見られたり、9月に入ってから少雨で生育に停滞の見られるほ場もあるが概ね順調で、生育の早いほ場では10月下旬からの出荷が見込まれる。農林事務所では、排水対策の徹底やハスモンヨトウの防除対策等を指導した。

(地域支援第一係・藤田 文彦)



【ほ場確認を行う職員】